

ボランティア活動の日米比較

～トッド・フラリー氏に聞く～

茨城県立中央高等学校 深谷 浩一

「ボランティアに関する実践報告」を寄せていただいたAETの Todd Frary 氏に、アメリカにおけるボランティア活動の実態及び高校での取り組み、また氏自身のボランティア活動に対する考え方や日本の高校生の印象などについて、率直なご意見を伺いました。日本の教育そのものに対する痛烈な批判も含まれているようです。以下はその翻訳です。

1. あなたは高校時代に何らかのボランティア活動の経験がありますか。もしあればそれはどのような活動でしたか。また、そのような活動をどのようにして知りましたか。その主催は？

(回答) 私の卒業した高校では、卒業の必須条件として、「3年生用研究課題 (Senior Project)」に取り組むことが義務付けられていました。3年生用研究課題とは、(日本の3年生にあたる) 学年として、地域社会のどこかで何かなすべき課題を一つ選び、それに取り組むことです。3年生の生徒会役員が、生徒が関心を持つようなアイデアを幾つか持ち寄り、アンケートの形で3年生に調査を行うのです。そのアイデアの中から自分たちが取り組む課題を多数決で決定し、3年生の生徒会役員が実際に活動するための計画や準備を進めることになります。

私が3年生だった年の場合、私たちは投票で学校の近くにあるコロラド州立公園のゴミ拾いをするを選びました。その公園は「神々の庭」(Garden of the Gods) といい、コロラドにしかない自然の岩層があり、地域住民にとっては環境的にも、文化的にも、そして歴史的にも大変重要な場所になっています。しかし、不幸にも旅行者が公園内の道路やハイキング用の小道沿いに紙屑を散らしているのです。だから、私たち3年生のクラスは(これも投票で) 平日にその場所へ行き、ゴミを拾うことにしたのです。この日は生徒全員が参加することになっていました。というのも高校卒業のための必修だからです。参加しなかった生徒 — 病気、その他の理由で — には学校から、コロラドが現在抱えている環境問題に関して20ページの論文を書くように要求されます。その論文には、取り上げた問題に対する実現可能な解決策が含まれていなければなりません。またその論文はこの「3年生用研究課題の日」(Senior Project Day) の2週間後に提出しなければならないことになっていました。

(2) 学校時代にボランティア活動の重要性について教えるような授業がありましたか。もしあれば、それはいつのことですか。またそれはどんな授業でしたか。聞くとところによると、アメリカの多くの高校では、校外でのボランティア活動の経験を生徒に課しているそうですが、それは事実ですか。もしそうであれば学校側が参加を勧めるような活動はどんな活動ですか。

(回答) 私の高校では、ボランティア活動の重要性に関する特別な授業はありませんでしたが、「3年生用課題」の準備に際して、その問題を話し合うために集会所で何回か学年集会を開きました。最初の集会は、もし私の記憶が正しければ、実施日の1ヶ月前でした。集会の目的はボランティアの全体的なテーマと大学進学や将来の就職について考えることの大切さについて話し合うことでした。2回目の集会は実施日の1週間くらい前でした。その目的は課題の実施にあたって、細部について話し合うことでした。始めの集会は担当の先生方(the high school counselors)によって運営され、外部の講演者も招待されました。2回目の集会は3年生の生徒会役員が司会から計画、運営まですべて行いました。

卒業するためには3年生用研究課題に参加することが求められました。今もそうだと思います。というのも、高校時代にボランティアの経験を持つ生徒を求める大学や雇用主は年々増えているからです。最近では採用にあたってこの経験がますます重要な考慮事項となっているのです。競争の激しい大学(や職種)においては、志願者に高校時代に一つ以上のボランティアの経験を持っていることを求めるところが増えています。私たちの高校では卒業の必須条件として研究課題の日を課していましたが、もし私たちが大学や就職の志願にあたって競争力を付けたいと思えば、自分自身でそれ以上のことをするべきだというのが学校の考えです。推薦された活動は多岐にわたっていました。どんな活動を選ぶかは、基本的に生徒に任されていたが、学校は私たちにもできそうな何十ものアイデアを載せたリストを作って提供してくれました。

大学や民間団体や公共機関の中には、特別なボランティア活動に参加した高校生に対して大学の奨学金を提供するところさえあります。たとえば、「ボーイズ・アンド・ガールズ・クラブ」(the Boys and Girls Club of America)でボランティア活動をした生徒を考えてみましょう。その生徒は膨大な量の時間をボランティアの仕事に従事し、その組織に貢献をします。その見返りに生徒は大学へ行くための奨学金をボーイズ・アンド・ガールズ・クラブに申し込むことができます。しかしながら、奨学金が自動的に受けられるというわけではありません。優れた応募理由を書き面接試験を受けた志願者のみに与えられるのが普通だからです。

(3) 近年、日本の文部省は他人への思いやりの気持ちを育てるために高校でのボランティア活動の重要性を強調しています。しかしながら、多くの学校では大学の入学試験に合格するための知識や技術を生徒に与えることだけに躍起になっているというのが現実です。中央高校も決して例外ではありません。学校は、全体としてみると、決して生徒にそのような活動を勧めているとは言えません。生徒がボランティア活動などに参加する必要はないと考える教師もいます。その一方で、ボランティア活動に関心を持ち、生徒にも是非参加させたいと考える教師は、生徒を入学試験に合格させるという「義務」を怠っているとして厳しく批判される傾向にあります。このような状況をいかがお考えですか。

また、日本の教育について最も大事だと思うことは何ですか。あなたの理想を実現するために、どんなことをしたいとお考えですか。また、日本の教師に期待することは何ですか。

(回答) まず、日本の高校生やその教師たちがボランティア活動に参加しないことについて、率直な意見を言わせていただきます。

日本には他人より自分のことばかり考える自己中心的な個人を生み出すような社会的な土壌があります。この国では入学試験に合格することに重点が置かれているので、生徒たちは価値あること、あるいは自分たちの教育(の目標)は試験で合格することだけだと考えるように洗脳されてしまうのです。彼らも彼らを教える教師たちも、社会的な責任を学ぶことの教育上の重要性に気づきません。そして「お前は試験に合格しなければならない!」と日々繰り返し繰り返し頭の中にたたき込まれます。が、「お前は責任ある大人になるにはどうしたらいいかを学ぶ必要がある。」とは、(私の知るところでは)アメリカの学校ほど強調されてはいません。

日本の16歳~18歳の生徒たちは、私がこれまで見た中でもっとも成熟していない、幼稚な高校生です。統計的に日本の生徒たちはアメリカの同年代の生徒たちより「学力標準テスト」(standardized test)では高いスコアを示すかも知れませんが、社会参加(social skills)という点ではアメリカの12歳と同じです。

アメリカの生徒たちは麻薬、銃、強盗、妊娠といった(悪い)環境の中で育つため、成熟するのが早い、とも言えます。しかし、またアメリカの高校生は若くても大人(young adults)だとみなされているという事実も否定できません。たとえば、運転の教習は16歳で受けられます。

「若い大人」とみなされているから、生徒は大人の活動に参加したり、大人の責任について学ぶことを期待されるのです。彼らは仕事を持ち、地域社会の中でボランティア活動をするのです。大学入学試験後の生活の準備をされているのです。アメリカの大学は単に知力や学力だけでなく、むしろそれ以外の資質により

大きな価値を置いています。つまり、それが成熟さ(maturity)であり、社会的な責任(social responsibility)なのです。だからアメリカの高校でも、そうした力を身につける指導をしているわけです。

一方、日本の高校では生徒を子供扱いにし、彼らをそのように振るまわせています。アメリカでは親が負うべき種々の責任を、日本では担任の教師が負っています。基本的に日本では、親の仕事を教師が受けついでいるようなものです。教師はさしづめ「昼間の親」といったところでしょうか。アメリカでは、親は高校生の息子や娘に大人のように振る舞うにはどうすればよいかを教え、教師は学校で彼らをそのように(つまり、大人として)扱うのです。

あなた方は生徒をボランティア活動に参加させたいとお考えですか。それには大人になることが必要です。まず、ハローキティやポケモンやプリントクラブなどを取り除いてください。その次に、若い大人として振る舞うことを教えてやるのです! いや、失礼。多くの20~30歳の人々もまた、こうした(子供っぽい)ものを楽しんでいるということを忘れていました。それからまた、この人々は、高校時代には試験に合格するにはどうすればいいのかしか教えられていませんでしたね。そうした人々に大人としての振る舞いを期待できるでしょうか。

(4) あなたの実践報告に何か付け加えたいことがありましたら、遠慮なく述べてください。

(回答) 大洗でのクリーンアップ作戦の時さえ、生徒たちは浜辺を子供のように走り回っていました。高校生と中学生の区別もつきませんでした!

手短に言えば、大洗海岸のような場所がゴミであれほど汚れているのは、海岸に行く人が他人にはまったく関心がないからです。他人のことなどまったくお構いなしに浜辺にゴミを投げ捨てるのです。また、人々が自己中心的なのは、試験の準備ばかりやっている日本の学校が(結果的に)自己中心的になることを勧めているからです。この国の若い(大人の)人々は学校の教育課程の一環として社会参加の仕方を学んでいないし、またその親もそれを身につけさせることに完全に失敗しています。さらに言えば、教師は生徒を子供扱いし、生徒に自分で考えさせる。— これは大切な大人の技能です — 余地を与えていません。これでは子供っぽい習慣が一向にくなりません。このような要因があって、なおかつ他人を助けることに関心を抱いたり、地域社会のボランティアのような活動を通して大人としての社会参加の在り方に興味を持ったりすることを、今の日本の高校生に期待できるでしょうか。彼らは多分数えきれないくらいのプリントクラブの写真の方に目を向けるのではないのでしょうか。私たちが日本の高校の中に教育上欠くことのできない重要な一部として、大人の社会的な対人関係や責任感を学ぶ場の必要性を強く訴えて初めて、将来に変化を見ることができるようなのです。